

## 教育学研究科・グローバル教育展開オフィス

大野真理子

- ・高等教育学コース
- ・博士後期課程3回生

### 成果の概要

1日目の午前は、本交流会の趣旨の説明後、香港大学の参加者と京都大学の参加者とで小さなグループに分かれ、事前リーディング課題であったYang(2013)とAlatas(2003)の2本文献について、それぞれの立場から意見交換を行った。特に印象に残っているのは、同じグループだったLiLi Yang先生からの問いかけて、なぜ日本の研究者は積極的に海外に研究成果を発信していかないのか?というものであった。私自身も、いずれは海外ジャーナル等への投稿をしてみたいとは思っているものの、研究テーマが日本の大学入学者選抜という非常にドメスティックなものであるため、海外の読者でそのような内容を知りたい人がどれくらいいるのかわからないという正直な思いを伝えた。すると先生は、世界の人々は、日本がどのように考えて、どのようなコンセプトでそのような仕組みを作ったのかに興味があるはずだと仰ってくれた。これまで国内の読者のみを想定して論文を執筆していたが、とても勇気づけられるコメントだった。

午後は、香港大学の学生による研究発表を聞いた。英語かつ中国思想の話であったため、十分に理解できたとは言いがたいが、中国人研究者の中で脈々と引き継がれる中国の思想や哲学が、研究者の姿勢に与える影響について検討していたように思う。これらの発表を聞いた感想は「私は何者なのか」ということであった。国籍上は日本人であるが、自分の中に受け継がれているかもしれない日本的な思想や哲学に対して無自覚である。そしてこの感覚は、翌日の京都大学のJunさんの発表を聞いて一層強くなった。

2日目は、京都大学の参加者側が研究発表を行った。はじめに、参加者全体に対して、石田さん・藤村さんによる発表・質疑応答ののち、発表者4名ずつ2つのグループに分かれ、質疑応答込み15分で自身の研究テーマに関して発表を行った。トップバッターの私は、近年の大学改革において、政策主導による「枠組み」だけを海外から輸入している現状や、補助金を使って大学を従わせようとする文部科学省のやり方などを説明した上で、そのような政策のひとつである、入学者選抜改革における多面的・総合的評価の導入について説明した。その上で、多面的・総合的評価という明確な定義がない「枠組み」を、各大学がどのように解釈・実践しようとしているのかという問いのもとに実施した事例研究から得られた結果の要点を紹介した。海外の人にも伝わるよう、日本の現状の説明に時間をとるようにしたが、10分での発表なのでどうしても要点のみになってしまい、問題の所在がどの程度伝わったか、さらに、自身が要点として選んだポイントが適切であったかといった反省点は多々残っている。ただ、英語によるプレゼンテーションをするということについては、場数を重ねることで、初めてプレゼンをしたときよりも度胸はついたと思う。今後は、様々な国は背景の人々に対して発表をするときに、何を伝えたいか、どうすれば伝えられるかを意識した構成・内容にしたい。

私の発表のあと、3名の院生からのプレゼンを聞いて、これまでコース外の院生との交流をもつ機会が少なかった私は、同じ教育学研究科の中でも、院生の研究関心が多岐にわたっていること、そして、それぞれ扱うテーマは異なっている、例えば海外から輸入された「枠組み」をどうローカライズするのかといったような面で、向いている方向には近いものがあることを知り、大変おもしろかった。私はもうD3だが、もっと他コースの院生と交流する機会に積極的に参加しておけばよかったと思うと同時に、最後にこのような機会を得ることができて本当に良かったと思う。GEOに感謝している。

最後に、英語でディスカッションをするにはまだまだ自分は未熟である。話したいことはあるのに言葉にできないもどかしさ。しかしこれも場数を踏まないと成長しない。英語での研究会・授業という、ある程度堪能な学生が集まるのが現状だと思う。そのような中、勇気をもって飛び込む学生が増え、受け入れられることを強く願う。